

農林水産技術会議
技術指導資料
平成27年3月

小麦「さとのそら」の 特性と栽培方法



千 葉 県

千葉県農林水産技術会議

目次

I	品種特性	1
1.	育成経過	1
2.	品種特性の概要	1
II	栽培方法	4
1.	転換畑における栽培方法	4
(1)	栽培のポイント	4
(2)	圃場の準備	6
1)	圃場の選定	7
2)	排水対策	7
3)	耕起・耕耘・整地	7
(3)	播種	8
1)	播種適期	8
2)	播種量	10
3)	種子消毒	10
4)	播種深	10
5)	鎮圧	10
(4)	施肥	10
1)	基肥	10
2)	追肥	12
(5)	除草	14
1)	土壌処理剤	14
2)	茎葉処理剤	14
3)	抜き取り	14
(6)	麦踏み	14
(7)	病虫害防除	14
1)	赤かび病	14
2)	赤さび病	15
3)	うどんこ病	15
4)	裸黒穂病	15
5)	縞萎縮病	15
6)	アブラムシ	15

(8) 収穫・乾燥・調製	15
1) 収穫	15
2) 乾燥・調製	16
2. 畑地における栽培のポイント	16
(1) 麦踏み	16
(2) 追肥	16
Ⅲ 栽培暦	17
1. 小麦「さとのそら」の栽培方法	

I 品種特性

小麦品種「さとのそら」は、これまでの主要品種「農林 61 号」の欠点である熟期が遅い、稈が長く倒伏しやすい、コムギ縞萎縮病に弱いなどの特性が改善された品種として、平成 23 年度に千葉県的小麦奨励品種に採用された。

「農林 61 号」と同じ通常アミロース含量の日本めん用品種で、原麦品質、加工適性も良好な品種である。

1. 育成経過

「さとのそら」は、群馬県農業技術センターにおいて、早生、多収、加工適性の向上を育種目標として、母親に「しゅんよう/きぬいろは」、父親に「ニシカゼコムギ」を用いて、平成 6 年に交配し、選抜・育成された。

平成 22 年 10 月 13 日に品種登録された。

2. 品種特性の概要

「農林 61 号」と比較すると、次のような特徴がある。

(1) コムギ縞萎縮病抵抗性がある

県内で蔓延しているコムギ縞萎縮病に対する抵抗性を持った品種である。

コムギ縞萎縮病発生圃場で行った現地試験では、「農林 61 号」に比べ生育が旺盛となり、生産性の向上が確認された（写真 1）。

その他の主要病害に対する抵抗性は、うどんこ病は“強”、赤さび病は“強”赤かび病は“中”であり、「農林 61 号」と同程度である。

(2) 出穂、成熟が早い

秋播き性程度はⅣで、花芽分化のためには「農林 61 号」より多くの低温遭温を必要とするが、出穂期は「農林 61 号」に比べ 1 日早く、また、成熟期は 3 日早い早生品種である（表 1、表 2）。

(3) 稈長が短く、耐倒伏性に優れる

稈長は「農林 61 号」に比べ 10cm 以上短く、耐倒伏性は“やや強”である（写真 2）。

(4) m²当たり穂数が多い

m²当たり穂数が「農林 61 号」よりやや多く、穂長はやや短く、収量性は「農林 61 号」と同程度である。

(5) 子実品質は「農林 61 号」と同程度

粒質は“粉状質”で、製粉歩留及びミリングスコア*は“やや高”く「農林 61 号」より優れている。60%粉粗タンパク質含有量、灰分含量、アミロース含量は

“中”で、「農林61号」と同程度である。

*ミリングスコア:製粉歩留と灰分の値から良い粉がどれほどとれるかを補正した指標で、一般的には高いほど良好と判定される。

表1 「さとのそら」の特性表

早晩性	品種名	来歴 育成場所 育成年	採用 年度	出 穂 期	成 熟 期	稈 長	穂 長	穂 数	芒 の 長 短	株 の 開 閉	穂 発 芽 性	脱 粒 性	秋 播 性 程 度	玄 麦 千 粒 重	容 積 重	品 質	諸抵抗性					適地	栽培 適性	概 評	
																	小 錆 ・ 赤 錆	う ど ん こ	赤 カ ビ	縞 萎 縮	耐 倒 伏 性			優 点	欠 点
早	さとのそら	(東山25号 (しゅんよう) ×西海168号 (きぬいろ は))F1 × ニシカゼコムギ 群馬県農技セ 平20年	平 23	4/16	6/5	71	7.9	354	中	中	難	中	IV	37	782	中の上	強	強	中	強	強	県下全域	良質、耐倒伏性強、縞萎縮病抵抗性強 転換畑に適する。	-	
中	農林61号	福岡小麦18号 × 新中長 佐賀県農試 昭19年	昭 28	4/17	6/8	86	8.0	340	中	中	難	中	II	37	788	中の中	中	中	中	中	中	県下全域	良質 転換畑に適する。	稈がやや細く、 やや開く。	

注1) 耕種概要: 普通畑(長生村、砂壤土)での条播栽培(70cm条)。

2) 出穂期: は種期を11月18日としたときの出穂期。

3) 秋播性程度: 生育初期における短日・低温要求の度合を示すもので、その程度を7段階に分け、要求度の高いものがVII、最も低いものがIである。

表2 「さとのそら」と「農林61号」の播種期別出穂期と成熟期

播種期 (月/日)	出 穂 期		成 熟 期	
	さとのそら (月/日)	農林61号 (月/日)	さとのそら (月/日)	農林61号 (月/日)
10/22	4/ 5	4/ 5	5/23	5/26
11/ 8	4/13	4/15	5/30	6/ 3
11/20	4/16	4/19	6/ 4	6/ 8
12/ 6	4/19	4/25	6/ 7	6/10
12/14	4/22	4/27	6/10	6/11

注) 試験は千葉市(壤土)で行った(平成25年播試験)



写真1 コムギ縞萎縮病発生圃場における生育状況



写真2 成熟期の株

II 栽培方法

1. 転換畑における栽培方法

(1) 栽培のポイント

高品質・高収量の「さとのそら」を安定して生産するためには、一定の生育条件を満たし、かつ、遅れ穂や一圃場内の生育ムラ、湿害や倒伏の少ないことが必要条件となる。したがって、排水対策や、播種、肥培管理等を適切に行い（図1）、各生育目標（表3）を満たすように栽培することが重要となる。特に、穂数は収量及び外観品質に与える影響が大きく、穂数が少なすぎても、多すぎても外観品質が低下しやすくなる（表4、図2）。穂数・収量・外観品質を確保するためには、茎立期までに十分な茎数を確保しつつ、過繁茂により有効茎歩合を低下させないよう管理する必要がある（図3）。

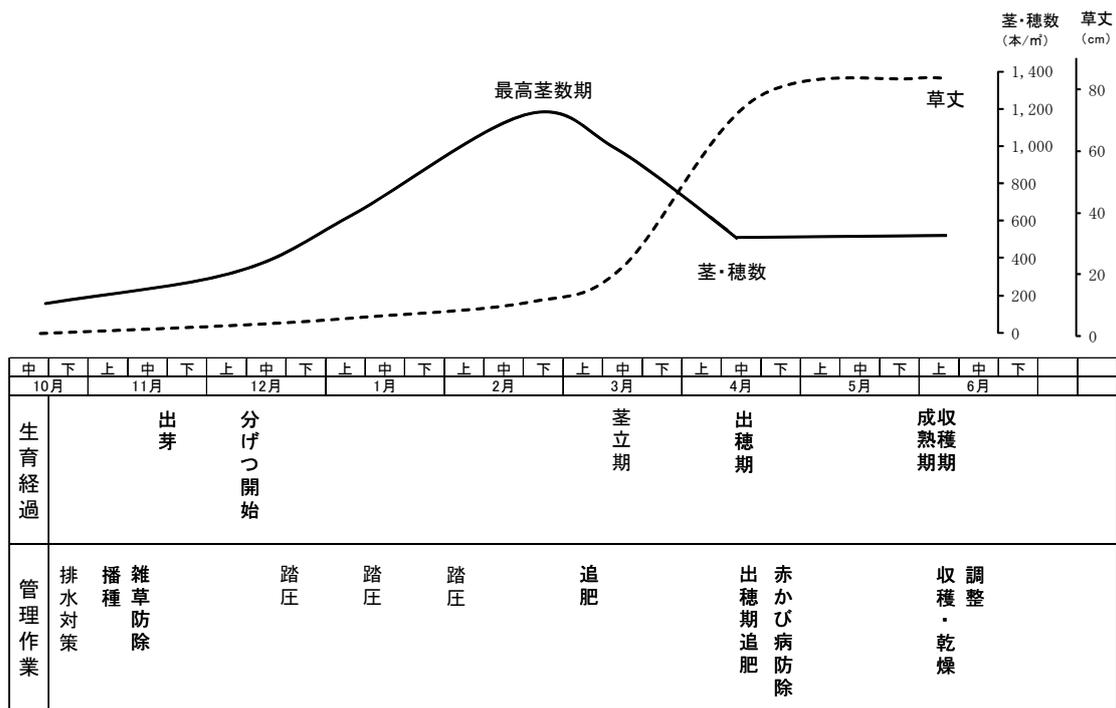


図1 生育の経過と管理

表3 生育目標

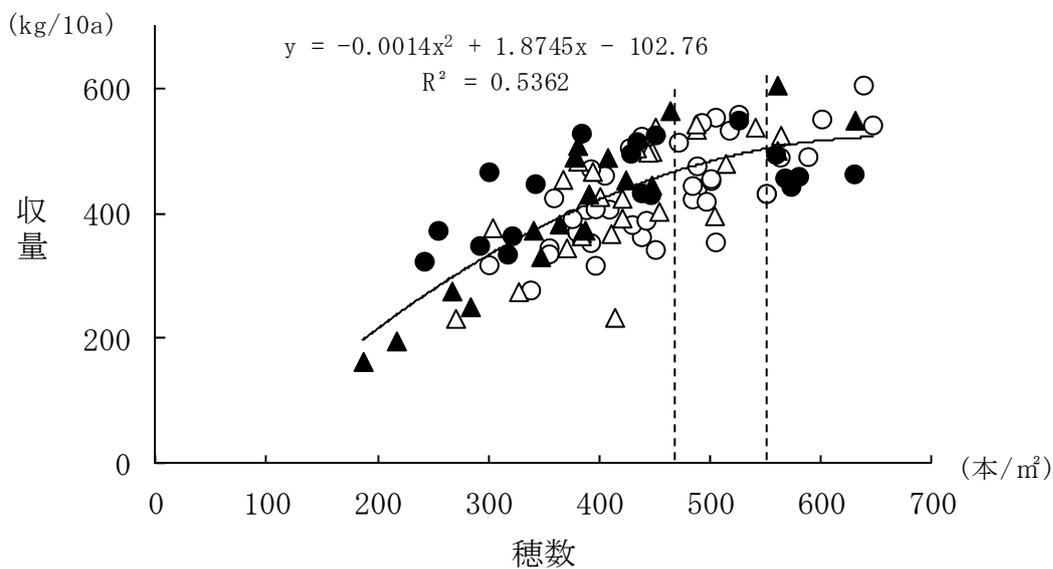
項	目	目標値
苗	立 数	100～150本/m ²
茎	立 期 茎 数	750～1,000本/m ²
穂	数	480～550本/m ²
1	穂 粒 数	22粒以上
千	粒 重	38g以上
収	量	400kg/10a以上

表4 収量構成要素と収量との相関係数

収量構成要素	収量との相関係数
穂 数	0.74 ***
一 穂 粒 数	0.41 ***
千 粒 重	0.20

注1) ***は1%の危険率で有意な相関があることを示す (n=56)

2) 試験は千葉市(壤土)で行った(平成24年播試験)



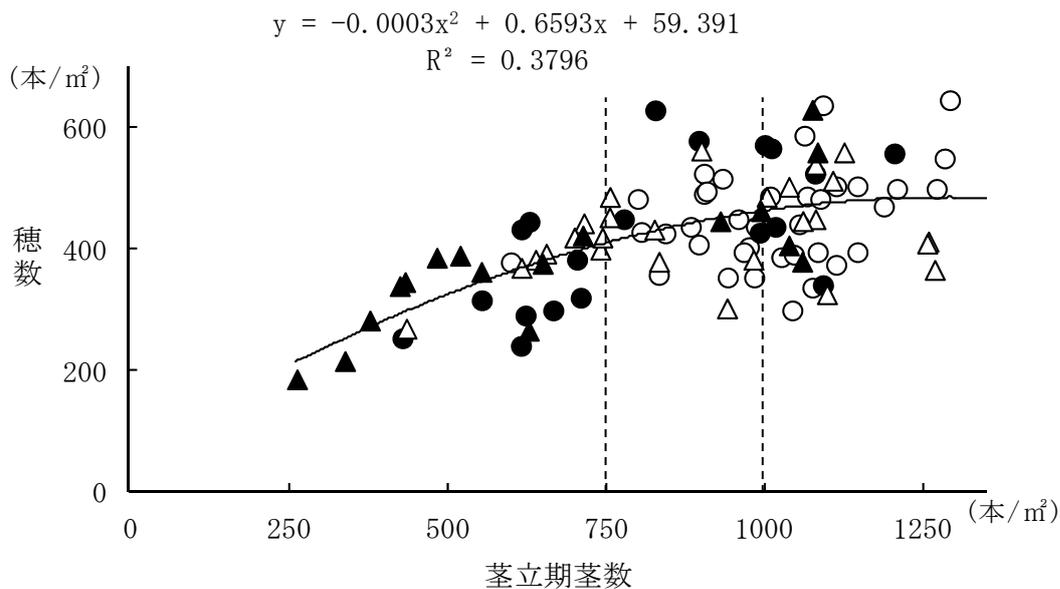
○外観品質4以下(平成25年播)	△外観品質4以下(平成24年播)
●外観品質5以上(平成25年播)	▲外観品質5以上(平成24年播)

図2 穂数と収量との関係

注1) 収量は水分12.5%換算

2) 外観品質は1(上上)～9(下下)の9段階評価

3) 試験は千葉市(壤土)で行った



○外観品質 4 以下 (平成25年播)	●外観品質 5 以上 (平成25年播)
△外観品質 4 以下 (平成24年播)	▲外観品質 5 以上 (平成24年播)

図 3 茎立期茎数と穂数との関係

注 1) 外観品質は 1 (上上) ~ 9 (下下) の 9 段階評価

2) 試験は千葉市 (壤土) で行った

(2) 圃場の準備

「さとのそら」に限らず小麦は湿害に弱い。特に、転換畑は地下水位が高いため、湿害も発生しやすい。湿害が発生すると、根腐れを起こし、分げつが抑えられ、収量が著しく低下する (写真 3)。さらに、子実の容積重、タンパク質含有率、フォーリングナンバー*が低下し、一方で、灰分が増加するため、等級及び品質ランクも低下する。

*フォーリングナンバー：でん粉が糊化した際の粘度、この値が低いと麺のコシがなくなり、煮崩れしやすくなる。



写真3 湿害を受けた「さとのそら」
水のたまりやすい手前側で生育不良が発生している

1) 圃場の選定

栽培を予定している圃場の排水性の良否だけでなく、周辺圃場における水の利用状況も考慮する。水稻を栽培している周辺水田からの水の浸透や排水路の影響により、小麦の登熟期間にあたる4月以降に湿害が発生しやすい。団地化による作付けを前提に圃場を選定する。

2) 排水対策

湿害を回避するには、本暗渠と営農排水対策を組み合わせる必要がある。特に、水稻後に作付けする場合は、水稻収穫後、出来るだけ早い時期に排水対策を施し、耕起までに圃場を乾燥させることが重要となる。

排水対策は明渠と補助暗渠の組み合わせにより行う。

明渠は、溝掘り機を使用し、圃場周辺の畦畔際に額縁状に作る。大区画圃場では、圃場周辺だけでなく圃場内にも一定の間隔で作る。

補助暗渠として、弾丸暗渠を施工する。弾丸暗渠は、振動式弾丸暗渠機（サブソイラ）等をトラクタで牽引し、本暗渠に直交する方向で弾丸が本暗渠溝に充填された疎水材を貫通するように施工し、本暗渠との連結を図る。施工間隔は2～3m間隔が適当である。

本暗渠の老朽化によって疎水材の容積が減少し、排水能力が低下した圃場等では、さらに、スポット暗渠を施工するのも有効である。スポット暗渠は、本暗渠直上部に10～15m間隔で、スコップやオーガで疎水材の確認される深さまで穴を開け、田面まで新しい靱殻を充填する。

3) 耕起・耕耘・整地

耕起、碎土及び整地作業の精度は、施肥や播種精度の向上を図る上で重要であ

る。砕土性、地耐力、排水性等、圃場条件と作業機の特性とを組み合わせた耕耘・整地作業方法を選択する。

耕耘をロータリで行う場合は、播種作業前に、ロータリ耕を1～2回行い、砕土された圃場へドライブハローシーダ等で播種する。ロータリ耕の耕深は、12～15cm、砕土率（直径2cm以下の小土塊の重量割合）は、60%以上を目標とする。

耕耘をプラウで行う場合は、プラウ耕及びロータリ耕並びにドライブハローシーダ等により耕深を段階的に浅くし、下層ほど土塊を大きくすることで、作土層の排水性の向上が期待できる。また、プラウ耕後、レーザーレベラで均平整地した場合は、直接ドライブハローシーダ、ドリルシーダ等で播種することが可能である。

（3）播種

1）播種適期

播種適期は11月上旬である。播種が早すぎると、茎立期までの茎数が過剰となり、有効茎歩合が低下し、穂数及び収量の低下を招く。遅い播種は、苗立ち率の低下(図4)や穂数の減少、弱小穂の増加を招き、成熟期が遅れ(表5)、収量及び品質が低下しやすくなる(図5)。

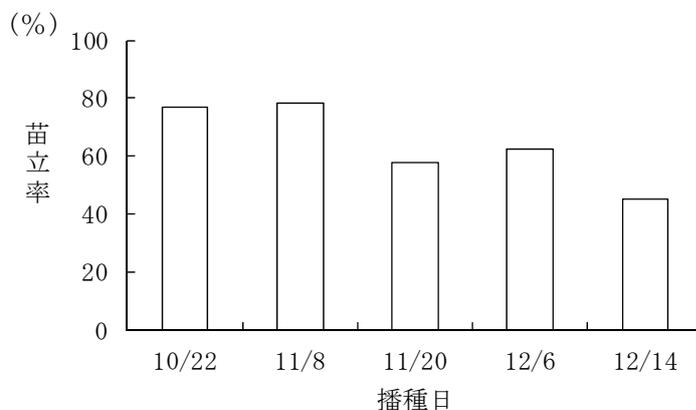


図4 播種期別の苗立率

注) 試験は千葉市(壤土)で行った(平成24年播種試験)

表5 播種期の異なる「さとのそら」の生育期

試験年	播種日 (月/日)	出芽日 (月/日)	茎立期 (月/日)	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)
平成24 年播	10/30	-	3/16	4/18	6/4
	11/9	-	3/16	4/20	6/5
	11/25	-	3/26	4/23	6/9
	12/10	-	3/30	4/29	6/16
平成25 年播	10/22	10/27	2/25	4/5	5/23
	11/8	11/18	3/13	4/13	5/30
	11/20	12/5	3/15	4/16	6/4
	12/6	1/4	3/22	4/19	6/7
	12/14	1/11	3/29	4/22	6/10

注) 試験は千葉市(壤土)で行った

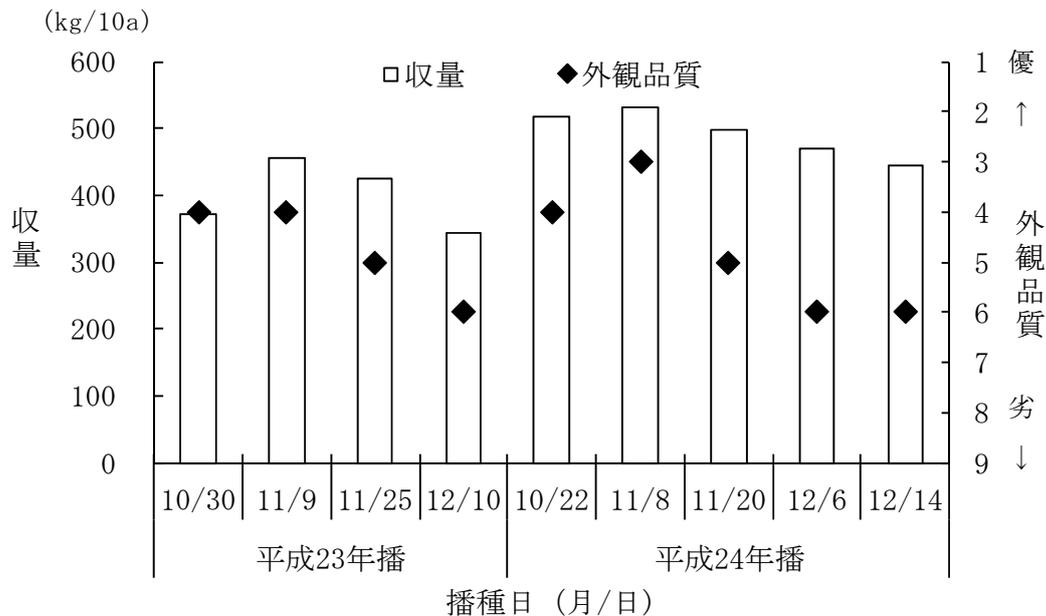


図5 播種期別の収量及び外観品質

注1) 条間 30cm、基肥窒素 8kg/10a、追肥窒素 4kg/10a (茎立期施用)

2) 収量は水分 12.5%換算。

3) 外観品質は1 (上上) ~ 9 (下下) の9段階評価

4) 試験は千葉市(壤土)で行った

2) 播種量

播種量は6～8kg/10a（約150～200粒/m²）とする。

「さとのそら」は、「農林61号」と比べ、分けつが旺盛であり、必要茎数を確保し易い。苗立数を100～150本/m²確保すれば、目標とする茎立期時の茎数及び穂数が確保できる。播種量が多いと穂数の過剰及び遅れ穂の増加を招き、外観品質が低下するので注意する。

3) 種子消毒

麦類は黒穂病や斑葉病等種子伝染する病害が比較的多く、薬剤による種子消毒が必要となる。

4) 播種深

播種深は2～3cmである。

深播きは苗立ち率の低下と分けつの抑制を招き、浅播きでは苗立ち率の低下や霜害などが発生しやすいので注意する。

5) 鎮圧

出芽や除草剤の効果を安定させるため、播種後にローラ等で十分鎮圧する。特に稲わらを鋤きこんだ場合は、種子周辺が乾燥しやすいので必ず鎮圧を行う。

(4) 施肥

基肥は、窒素肥沃度の低い砂質の圃場や、畑転換期間の長い圃場では施肥量を多くする。逆に大豆後など窒素成分が残っている圃場や、粘質土では減肥する。生育後半の窒素吸収が収量及び品質に与える影響が大きいため、追肥は重要である。また、小麦は土壌pHが低いと生育が不良となって、減収する。このため、pHが低い場合は、石灰等を施用してpH6.0以上に矯正する。

1) 基肥

窒素6～8kg/10a、りん酸15kg/10a、加里12kg/10a施用し、茎立期の茎数750～1,000本/m²を確保する（表6）。基肥窒素を必要以上に施用しても、過繁茂となり有効茎歩合が低下するため、穂数や収量は増加しない（図6）。

また、全量基肥肥料として緩効性肥料を施用し、追肥を省略する場合は、30日タイプのリニア型被覆尿素（LP30）を用いると収量及び外観品質が安定する（図7）。窒素の施用量は総計で10～12kg/10aとする。

表6 コムギの施肥基準（転換畑）（単位 kg/10a）

	施用時期	窒素	リン酸	加里
基肥	播種時	8	15	12
追肥	3月上旬	2	—	—
計		10	15	12

注) ドリル播における施肥基準である

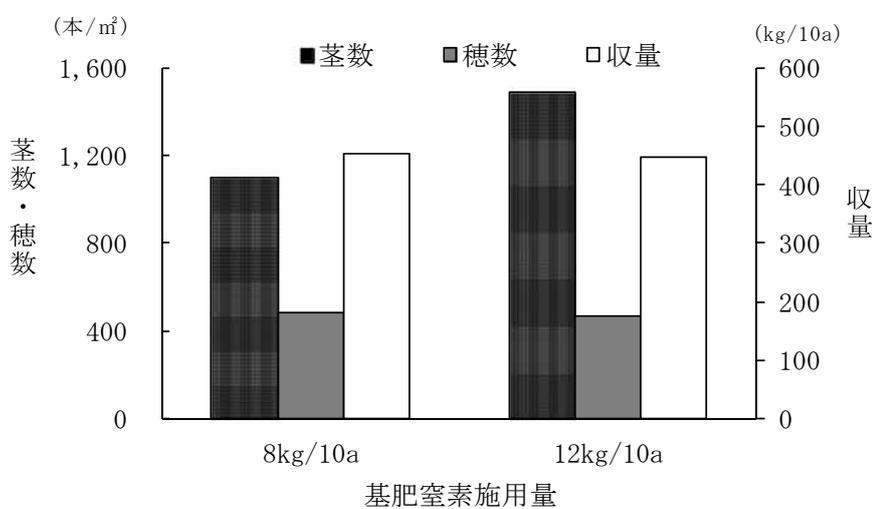


図6 基肥窒素量を異にした場合の「さとのそら」の茎立期茎数、穂数及び収量

注1) 平成23年11月9日播種、平成24年3月16日に窒素4kg/10aを追肥

2) 試験は千葉市（壤土）で行った

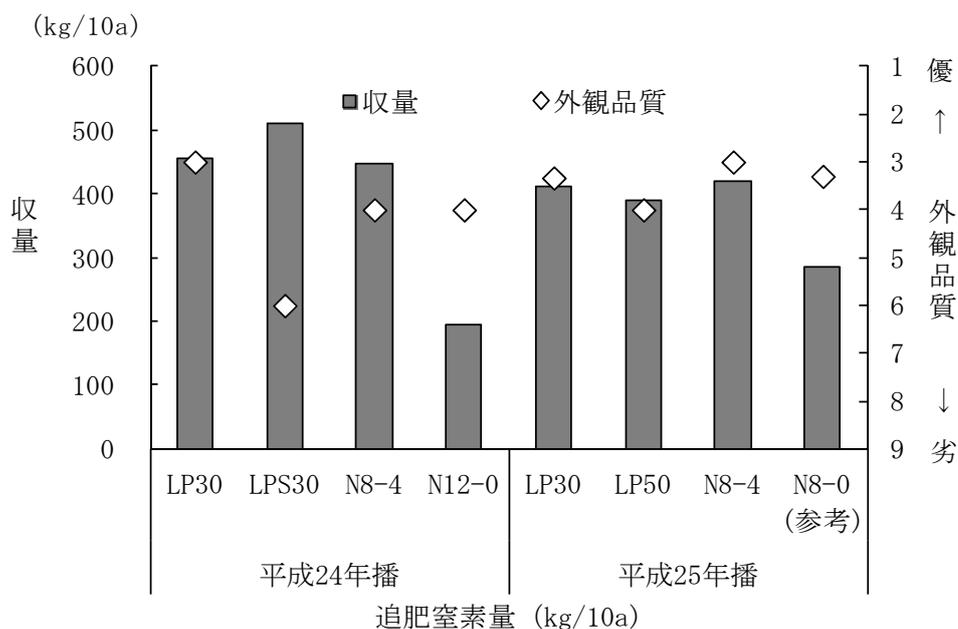


図7 緩効性肥料を用いて栽培した「さとのそら」の収量及び外観品質

注1) 平成24年11月15日及び平成25年11月12日播種

2) LP30は30日タイプリア型被覆尿素、LP50は50日タイプリア型被覆尿素、LPS30は30日タイプシグモイド型被覆尿素を示し、いずれも窒素12kg/10aを播種時に施用

3) N0-△は塩安を播種時に○kg/10a、茎立期の4~8日前に△kg/10aを施用

4) 播種時に全ての試験区で、リン酸、加里ともに10kg/10aを施用

5) 外観品質は1(上上)~9(下下)の9段階評価

6) 試験は千葉市(壤土)で行った

2) 追肥

11月上旬に移植した「さとのそら」は、3月中旬頃に茎立期を迎える。この時点において、700~900本/m²の茎数を確保しておく必要がある。「さとのそら」は、茎立期約10日前(11月上旬播種の場合3月上旬頃に、幼穂形成を確認した時)に4kg/10aの追肥を行う。施用時期がこれより早い、もしくは施用量が少ないと、穂数が少なくなり減収する。また、施用時期が遅い、もしくは、施用量が多すぎると遅れ穂の増加等により外観品質が低下しやすくなる(図8、9)。

地力が低く出穂期以降の窒素不足が心配される場合は、千粒重、タンパク質含有率を高めるために、出穂期に窒素2kg/10a程度施用する。

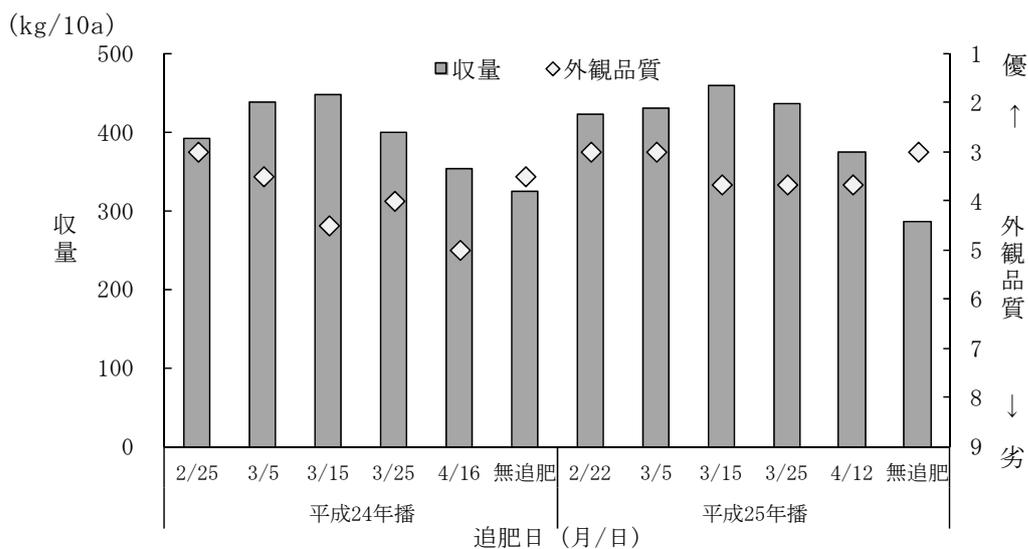


図8 追肥時期別の収量及び外観品質

- 注1) 平成24年11月12日及び平成25年11月12日播種、基肥窒素8kg/10a、追肥窒素4kg/10a
- 2) 茎立期は平成25年3月14日及び平成26年3月15日、出穂期は平成25年4月12日及び平成26年4月15日
- 3) 収量は水分12.5%換算
- 4) 外観品質は1(上上)～9(下下)の9段階評価
- 5) 試験は千葉市(壤土)で行った

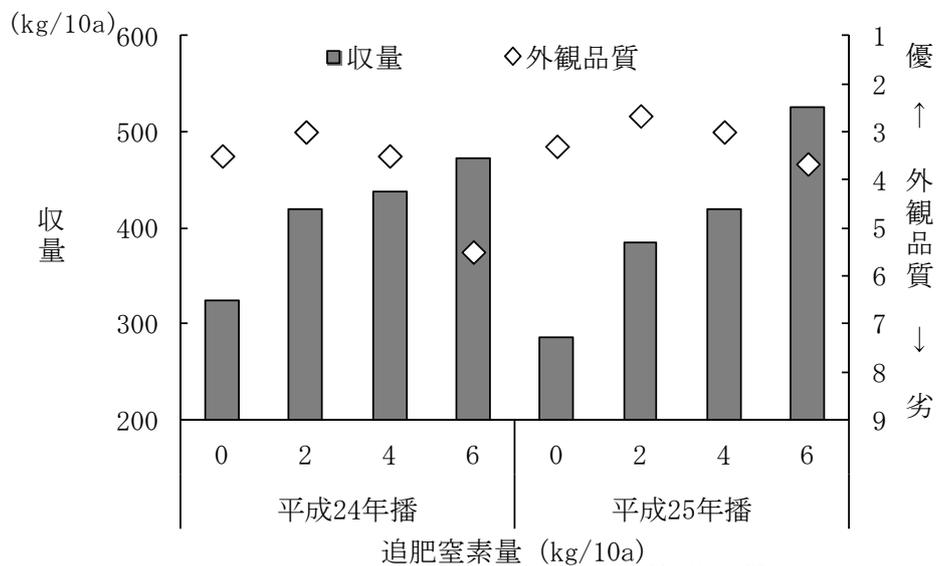


図9 追肥窒素量別の収量及び外観品質

- 注1) 平成24年11月12日及び平成25年11月12日播種、基肥窒素8kg/10a、両年ともに追肥は3月5日施用
- 2) 収量は水分12.5%換算
- 3) 外観品質は1(上上)～9(下下)の9段階評価
- 4) 試験は千葉市(壤土)で行った

(5) 除草

1) 土壌処理剤

出芽後に散布できる除草剤は、対象雑草が限定されているので、播種直後に必ず土壌処理剤を散布する。

薬剤は、土壌条件、剤の特性を考慮し、使用基準に従って選択する。

2) 茎葉処理剤

対象雑草が限定されているため、圃場の草種を確認して使用する。また、処理時期も限定されているため、麦や雑草の葉齢を確認し、遅れないように注意する。

3) 抜き取り

カラスムギやカラスノエンドウ等の種子は、収穫物に混入しやすいので、早めに抜き取る。

(6) 麦踏み

「さとのそら」は分けつが旺盛なため、特に、早播きした場合や暖冬で生育が進み、過繁茂が心配される場合は必ず行う。

実施適期は3葉期～茎立期直前までの12月中旬から2月下旬となる。年内に1回、年明け以降に2～3回、2週間程度の間隔をあけて行う。冬が寒く、生育が遅れている場合は1回程度にとどめる。

方法は、ローラー等を用いて、土が乾いている晴天の日に行う。土壌水分の高い圃場、晩播や肥料不足等により、生育量が不足している圃場では、逆効果となるので控える。

(7) 病害虫防除

本県の主要病害虫は、赤かび病、うどんこ病、さび病、裸黒穂病、アブラムシ等である。中でも、最も注意しなければならない病害は赤かび病である。

1) 赤かび病

「さとのそら」の抵抗性は「中」であり、「農林61号」と同じである。このため、赤かび病の薬剤防除は、必ず行う。

種子伝染を防ぐために種子の消毒は必ず行い、開花盛期（出穂後約7～10日後）に、予防のために適切な薬剤を使用基準に従って散布する。また、1回目散布の7～10日後に2回目散布すると、予防効果が大きい。開花期以降の降雨等により赤かび病が発生しやすい状況では2回目の防除が必要である。

2) 赤さび病

「さとのそら」の抵抗性は「強」であり、「農林 61 号」より優れているが、前作でさび病の発生がみられた圃場では、窒素を控えてカリを十分施す。また、さび病が発生した場合は、発生初期に 1～2 回適切な薬剤を使用基準に従って散布する。

3) うどんこ病

「さとのそら」の抵抗性は「強」であり、「農林 61 号」より優れているが、雨の多い年や遅播き、厚播き、多肥条件だと発生しやすいので注意が必要である。発生が見られた場合は、開花始めから開花最盛期にかけて、適切な薬剤を使用基準に従って散布する。

4) 裸黒穂病

発病後の防除法が無いため、発病株をみつけたら胞子が飛び散らないように注意して完全に抜き取り除去する。

5) 縞萎縮病

「さとのそら」の抵抗性は「強」であり、「農林 61 号」より優れるため、常発圃場では、「さとのそら」への切り替えにより増収が期待できる。「さとのそら」は、全く罹病しないわけではないので、過湿条件の圃場での作付を避け、堆肥あるいは稲わらを施用する場合には播種前にすき込むようにする。

6) アブラムシ

年によって発生時期は必ずしも一定ではないが、一般に出穂期頃の発生が多い。穂や茎葉に寄生して麦の汁液を吸い稔実を妨げる。高温、乾燥の年に発生が多い。発生がみられたら、適切な薬剤を使用基準に従って散布し防除する。

(8) 収穫・乾燥・調製

1) 収穫

「さとのそら」の成熟期は、「農林 61 号」と比べ、1～3 日程度早く、出穂期後 48 日程度である。収穫適期は、穂がわん曲し始めた頃で、成熟期（穂軸や粒は緑色が抜け、粒にはツメ跡がわずかにつく）後 3～4 日程度である。収穫は、穀粒水分が 30% 以下になってから、時間は、朝露が乾いてから作業を始める。成熟期後は雨に当たると容積重や外観品質が低下するので、天気予報等を参考に計画的に収穫を行う。また、赤かび病が発生した圃場では必ず刈り分けを行う。

2) 乾燥・調製

コンバインで収穫した小麦は高水分のものが多く、収穫後、できるだけ早く循環型乾燥機等を利用して乾燥する。

水分 30%以上だと穀粒の循環が悪くなる場合があるので、張り込み量を乾燥機容量の 80%程度に抑え、循環速度も速める必要がある。

高温乾燥は品質の低下を招くため、乾燥始めは通風乾燥を行い、徐々に送風温度を上げる。送風温度は、穀粒水分 20~30%では 40℃未満、20%以下では 60℃未満とし、未熟粒を多く含む場合は、さらに温度を下げる。仕上げ水分は 12.5%以下とし、2.2mm 以上の篩で選別し、麦稈・ノゲを十分に取り除く。

2. 畑地における栽培のポイント

ここでは、畑地栽培で特にポイントとなる点のみを記載する。その他については、転換畑における栽培法に準じて管理する。

(1) 麦踏み

黒ボク畑は転換畑に比べて肥沃なので、過繁茂となりやすい。そのため、麦踏みは必ず実施する。

(2) 追肥

施用時期は、転換畑と同様、茎立ち期前 10 日の 3 月上旬頃が目安となる。しかし、施用量は、転換畑より少なく、窒素成分で 2 kg/10a 程度とする。生育が旺盛な場合は追肥を控える (表 7)。

施用時期		窒素	リン酸	加里
慣行条播	基肥 播種時	5	10	8
	追肥 3月上旬	2	-	-
	計	7	10	8
ドリル播	基肥 播種時	8	15	12
	追肥 3月上旬	2	-	-
	計	10	15	12
全面全層播	基肥 播種時	10	20	16
	追肥 3月上旬	2	-	-
	計	12	20	16

Ⅲ 栽培暦

1. 小麦「さとのそら」の栽培方法

平成25年9月 千葉県・千葉県農林水産技術会議作成（平成26年11月改訂）

小麦「さとのそら」の栽培方法

- 排水対策は万全に行いましょう！
- 播種適期は11月上旬です！
- 追肥は3月上旬に施用しましょう！
- 開花期に赤かび病を予防しましょう！

品種特性（「農林61号」と比べて）

- 成熟期は3日早い
- 稈が短く、倒れにくい
- 縞萎縮病に強い
- 赤かび病抵抗性は同程度
- 茎・穂数が多く、穂がやや短い
- 収量は同程度



さとのそら

農林61号

穂揃り頃の姿



さとのそら
倒伏に強い

農林61号

さとのそら
縞萎縮病常発田での生育も良好

月 旬	10月			11月			12月			1月			2月			3月			4月			5月			6月																				
	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中																		
生育ステージ	出芽									最高分けつ期									茎立期									出穂期									成熟期								
主な作業	排水 対策			基肥 播種			除草剤散布			麦踏み									追肥									赤かび 病予防									収穫 乾燥 調製								

栽培のポイント

排水対策

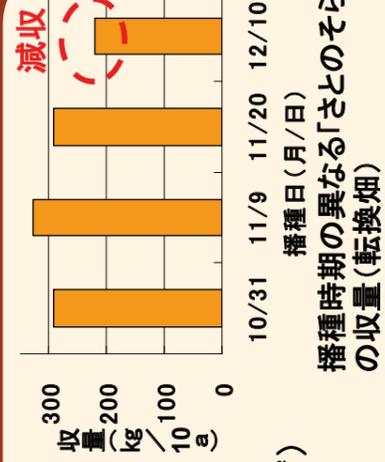
- 栽培圃場を団地化して地域排水に努める。
- 地下水位は50cm以下を目標とする。
- サブソイラ等で本暗渠に直交する方向に2～3 m間隔で弾丸暗渠を施工する。
- 明渠を掘削し、排水路へ連結させる。

基肥

- 土壌のpHが6.5～7.0となるよう石灰で矯正する。
- 窒素：リン酸：加里＝6～8：15：12kg/10a

播種

- 播種適期：11月上旬
（12月以降の遅播きは減収しやすいため、遅くとも11月中旬までに播種する）
- 播種量：6～8kg/10a
（目標苗立数：100～150本/m²）
- 種子消毒を行う。
- 播種深は2～3cmとする。



除草

- 雑草が多い場合は、耕起前に非選択性除草剤を散布する。
- 播種前の砕土は丁寧に、播種後に土壌処理剤を散布する。
- 雑草が多発する場合、草種に応じた茎葉処理剤を散布する。

麦踏み

- 本葉3葉期を過ぎてからローラー等を用い2～4回程度行う。

追肥

- 転換畑や地力の低い畑では、追肥による増収効果が特に高い。このため、茎立期の約10日前（11月上旬播種の場合、3月上旬頃）に窒素成分で2～4kg/10a施用する。
- 出穂期の葉色が薄い場合は、粒張りを良くし、タンパク質含有率を高めるため、出穂期に窒素成分で2kg/10a程度を追肥する。ただし、出穂期以降の窒素過多は、等級を低下させる危険性がある。

赤かび病の予防

- 赤かび病に対する抵抗性は「農林61号」と同程度のため、必ず開花盛期（出穂後約7～10日）に薬剤を散布する。

収穫

- 収穫は、穂首が黄化してから約3日後、穂がわん曲し始め、穀粒水分が30%程度となる頃を目安として行う。
- 刈り遅れると倒伏し、穂発芽や外觀品質の低下を招くので、適期収穫に努める。

乾燥・調製

- 穀粒水分が30%以上の場合は、穀粒の循環が悪くなる可能性があるので乾燥機の張込量を80%以下とする。
- 高温乾燥は品質の低下を招くため、乾燥始めは通風乾燥を行い、徐々に送風温度を上げる。送風温度は、穀粒水分20～30%では40℃未満、20%以下では60℃未満とする。
- 乾燥仕上げ水分は、12.5%以下にする。
- 調製は2.2mmの網目で丁寧に、麦稈・ノゲを十分に取り除く。

小麦「さとのそら」の特性と栽培方法

発行年月日 平成27年3月

発行 千葉県・千葉県農林水産技術会議

執筆者 農林総合研究センター 水稻・畑地園芸研究所 水稻温暖化対策研究室

室長 鶴岡康夫

研究員 望月 篤

同 畑地利用研究室

室長 鈴木健司

主席研究員 清島浩之

「私的使用のための複製」や「引用」など著作権法上認められた場合を除き、
本資料を無断で複製・転用することはできません。

小麦「さとのそら」の特性と栽培方法

平成27年3月

発行 千葉県・千葉県農林水産技術会議

事務局 千葉県農林水産部担い手支援課技術振興室

〒260-8667 千葉市中央区市場町1-1

TEL. 043-223-2907

FAX. 043-201-2615

